
異界の骨董品店～オルゴールの鳴る店～

瑞谷龍司

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

異界の骨董品店～オルゴールの鳴る店～

【Zコード】

Z0182M

【作者名】

瑞谷龍司

【あらすじ】

人間や異形の者たちが望む物を取り扱う骨董品屋「音木箱」。そこには摩訶不思議な物が所狭しと並べられていた。買い手が物を望み、物が買い手を望む時、いつ何時でもその店は現れる。たとえ、買い手が天国を見ようとも、地獄を見ようとも。

大学三年生になつた涼一は、小学校の時に見た「あるもの」を探し続けていた。それは、「死神の鎌」。見つかるはずないとわかつてはいるものの、諦めきれずに十年以上の月日を費やして探していった。あるとき、友人から不思議な都市伝説の話を聞く。それは突如

現れる不思議な店で、欲しい物を何でも売ってくれるというモノ。涼一は半信半疑でその店を探すことにした。このときから、彼の運命は大きく変わった。

死神の鎌で取引を

あんた、知つてるか？

人間つて奴ア欲望が尽きねえ。金だの物だの何だのと、ただ山のように積み重なつていく「物」を見ても、まだ満足しねえときた。そんなかにはよ、無茶なもんだつていくつもあんのや。たとえばよ、

相手を石にしちまう蛇。

不老不死の妙薬。

どんな願いだつて叶える鏡。

あんただつて、バカな話だと思つだろ？

だがよ、そんな人間の欲望を叶えちまつ店があるのや。いや、人間だけじゃねえよ。そりや異形だつて欲しがるもんもあるのさ。

現に、おいらだつて欲しこさ。何をかつて？ そりや言えねえけどもよ。

それはどこにあるかつて？

おいおい、自分で探しなよ。

まあ、教えんでもないがね。ただ、おいらも又聞きだ。『じぢや』

ぢや言われてわからねえからな。

いいかい？ 一度しか言わねえ。よつく聞けよ。

その店はどこだつて商いをしてる。それがよ、本当に何かを必要としてる奴だけが見えちまう、不思議な店なんだそうだ。

建物と建物、暗い小道の横、ビルの屋上、物の怪道の端。どこだつてそいつはいるのさ。

求めりや、答える。買った相手が天国を見ようと地獄を見ようと。

つまり、だ。あんたが心から欲しいものを願えば、あつちから出向いてくれるつてわけよ。

あんたは何を望むんだい？ あ、いや、やつぱり言わなくていい。

おいらだつて教えねえんだ。対等といひや。

何？ 昔、建物の間にぼろつちい店が急に見えたつて？

ほお。本当に出会つた奴あ初めて見たよ。

あんた、何かを強く望んでるみてえだな。

そいつあ、今でもかい？

でも、やめといたほうが身のためだぜ。物によつちやあ、無間地獄行きよ。おお、くわばらくわばら。

どういう意味か？ なんだ、それもわからんねえか。

簡単よ。つまりそいつを貰う代価として、あんたの生活は一変しちまうつてことや。良くも悪くもな。

あんたはその代価を支払えるか？ まるで別の人生に変わっちまうかもしれねえってわかつてても。

おいら？ おいらは「めんだね。今的生活で十分さ。

ああ、あんたたち人間つてのは不便だね。望まなきやいいもんもあるのこさ。

憐れ憐れ。おいらたちみてえな角がねえくせに、人間て奴はどうして鬼より怖いのかね。

そいつあれか。心に角が生えてるからかね。

よく、欲しいものはなんだと聞かれる。誕生日が近くなると、親だけじゃなく友達にも聞かれる。そういうときは、無難なものを答えるんだ。バットやグローブ、ちょっと高価な物だとゲーム本体、とか。

まあ欲しい物には変わりない。確かに欲しい物ではあるけど。でも、一番欲しい物じゃない。

僕が一番欲しい物は、きっと誰かがくれるものじゃない。手に入れられるかどうかもわからない。

小学校の図書室で読んでいた本に載っていた「アレ」。それを見たとき、衝撃を受けた。僕が欲しい物はこれだと思った。それまでは何を貰つても虚しさを感じていたけど、これが貰えるなら喜んで自分の物全てを差し出してもかまわないと思った。

その本の名前は忘れたけれど、そこには確かに書かれていた。黒いマントを着た、骸骨の絵。それが持っていた、鎌。

そう。僕が欲しいのは、死神の鎌だ。

誤解を生むかも知れないが、僕は誰かを殺したいわけじゃない。誰かの寿命を減らしたいわけでもない。

逆なんだ。命を取るんじゃなくて、命を救いたいんだ。

どうやって？ 簡単だ。死神が落とした鎌を探して、僕が先に拾う。そこで、言つんだ。

返して欲しけりや、僕の弟を救えって。

そう、僕が本当に欲しいのは、病弱の弟の命なんだ。

物心ついたときからずつと疑問に思つてた。

どうして僕はこんなに健康で、弟は学校にも通えないほど体が弱いんだろうって。

弟は生まれつき病気を持つてた。難しい病名はいつも覚えられないが、とにかく外に散歩に行くのも難しいらしい。

だから、ずっと負い目を感じていた。いつそ、僕も病気になれば、入院すればってずっと思つてた。

僕と弟は仲が良いのは、そういう境遇だけというわけではなかつた。例えば弟が病気でなくて、僕の世話が要らなかつたとしたら、きっと僕たちは兄弟で野球選手を目指していたに違いない。

これは悪い夢だ。目が覚めたらきっと元気な弟が俺を起こしてくれる。何度も願つて眠りにつき、起きたときに絶望したことか。そんな、奇跡的になんとか生きてきた弟が十五歳になつた、先月の誕生日。

その均衡が崩れた。

弟の病気が、急激に進行し始めた。

大学の中世民俗学のゼミを専攻している僕、いや、俺は、その日からほとんどの寝ずに資料を漁つた。

落ちてるはずなどない、死神の鎌を探して。

いつもほとんど無表情な日吉だが、今日は珍しく口を細めて苦い顔をしていた。

「お前がいつも」のソファで寝てるから、俺たちが教授に嫌味を言われるんだぞ。」

「ああ、じゃあ今度からはベッドを搬入しとくよ。」

機嫌悪いのは同じだと言わんばかりに鼻で息をついた。

「別に寝るなとは言ってない。ただ、このソファは教授のお気に入りなんだ。知つてて寝てるだろ。」

テーブルの上に置かれた五冊の分厚い本を見やり、また眉を顰める。

「また家に帰つてないのか。」

「・・・家だと集中できない。」

「・・・栄一くんがいるからか？」

弟の名前を出され、よういつそう強く睨みつけた。

「栄一は関係ない。」

立ち上がり、本を持ち上げる。その上の「用紙」、日吉が持つてくれた。

「また、死神の本か。」

「なんか文句あんのかよ。」

喧嘩越しで歩き出した俺を一瞥し、隣に立つた。

「なんで死神なんだ？」

「悪趣味つてか？」

「だいぶな。」

ふん、と鼻で笑つてやつた。

「お前だつて魔女狩りじゃん。悪趣味。悪魔。変態。」

日吉がくすりと笑みを漏らした。

「お互い様だな。」

「うん。」

素直にやつ言つと、先ほどの重い空気が瞬時に和んだ。

図書館室に入ると、顔なじみの司書がにこにこと挨拶をしてきた。

俺と日吉もそれに応じながら、奥へと歩く。

中世民族・史学の棚に入ると、途端に空気が変わった。

重々しく、人を寄せ付けないような匂い。俺はこここの雰囲気が好きだった。

唯一、賛同してくれたのは、日吉だけだった。何故だらうか、こいつとは正反対のようで、よく気が合つのだ。

「えーと、この本は・・・」この列のお・・・

指で触れながら、何メートルもある一列を辿つていく。こここの蔵書は本当に多く、他では滅多にお目にかかれない本も大量にある。まさに宝庫の山なのだ。

「あつたあつた。次は、ペストリー？・・・あれ、ねえな。」

眉根を寄せながら辿つていくと、どんどん肩があたつた。

見れば、日吉が一冊の本を下に置いて別の本を読みふけつていた。

「あのお、日吉くん？ まずは返そいや。」

冷たく一瞥すると、またすぐに本に目を戻す。

「俺の本じやない。お前、戻しとけよ。」

「ええ？ そこはお前、普通は親切に返しとくべきじやない？」

「・・・いい材料の本を見つけたんだ。」

ちらりと背表紙を見せてきた。

魔女狩りについての本である。

確かに、読みたいだらうけれど。

「・・・わかつたよ。」

ぱつ、と呟くと、一冊を拾い上げ、再び棚に目を行き来させた。それから、どのくらいかかっただろうか、やつと全部戻し終えたときには、昼休み開始のチャイムが鳴つていた。

「はあー、終わつた。おし、昼飯行くか。」

「前回は俺がおこつたから、次はお前だな。」

「はいはー。今日はなんにする？」

「・・・パン。」

あぐびしているその顔のまま、日吉に振り向いた。

「そんなんでいいのか？」

にやりともせず、真剣に田吉が頷いた。

「・・・話しがある。」

「え、なに？ その手の話？」

「どの手だ？」

俺のぎこちないひきつり笑いで察した田吉が、鼻で笑った。

「違う。お前の欲しい物の話だ。」

ぴた、と足が止まった。

先ほどとは打って変わつて、凄みを利かせた瞳で睨んだ。

「・・・本当か？」

田吉は視線をそらしながらポソリと言つた。

「俺も聞いただけだが、それでもお前には伝えておこうと思つてな。」

「それからは一人とも一言も喋らず、無言でパンを買つた。

普段からも人気の無いベンチに座り、やはり言葉を交わさずにパンをぼそぼそと食べ終えた。

その後にすぐ会話をするわけでもなく、重い沈黙が俺らを包んでいた。

十分ほどしたくらいだろうか。耐えられなくなつて、俺が沈黙を破る。

「んで、その・・・俺が欲しい物の話つて？」

考え込んでいた田吉も、前を向いたまま小声で言つた。

「これが本当の話なのか、ただの都市伝説なのかはわからない。ただ、こいつの話を聞いた、といつだけだ。」

小さく頷くのを確認すると、田吉はため息と共に語りだした。

「俺の先輩の友達の人で、俺も会つたことはない。でも、そういうオカルト系にかなり詳しい人らしいんだ。その人も誰かから聞いたつて話なんだけどな。」

言いにくそうに言つた後、不意に俺の顔をまっすぐに見つめた。
「建物と建物の間、もしくは裏道の横、もののけが通る道の端。
それ』はどこでも現れるらしい。場所も時間も関係ない。『それ』
は突然、目の前に現れるとか。本当に突然現れるのか、それともそ
れまでそこにあつて突然見えるようになるのかはわからないそうだ。
」

そこでたまらず口を挟んだ。

「いいから、『それ』つてのは一体なんなんだよ？ 俺の欲しいア
レなのか？」

何度も口を開け閉めすると、意を決して声を出した。

「お前、アンティークは知つてるよな？」

「あ？ ああ、骨董品だろ？」

「そうだ。『それ』は、骨董品屋なんだ。それも、ジャンルがない。
望むもの全てが揃つているとか。」

なんだか拍子抜けした。日吉が言つているのは、てつきり死神の鎌
のことだと思つていたのに。

「それで？ その骨董品屋に、鎌が置いてあるってわけ？」

「俺はただ聞いたことがあるだけだと言つてる。俺に聞かれてもわ
からない。ただ、そこにはなんでも揃つてるらしい。」

ふん、と鼻で笑つた。確かに死神の鎌を探す俺もバカだが、こんな
話を真面目に語る日吉もバカだな、とおかしくなつた。

「・・・バカにしてるだろ。」

「いーえ。そんなそんな、とんでもない。」

一本調子で淡々と吐き捨てるのを横目で見ながら、ため息をついた。

「・・・俺もそう思つた。だが、お前にはすがりつくものを選んで
いる場合じやないだろ。」

その言葉に、顔が凍りついた。

そうだった。もう、あまり時間がない。

昨日も栄一は発作を起こしかけた。このままだと、発作を起こし
て病院に行った姿が最後になつてしまふかもしない。

日吉は立ち上ると、俺を見下ろして言った。

「その骨董品屋は、心から何かを望んでいる者の前にしか現れない・

・・時間が無いだろ。頼るだけならタダだぞ。」

そういうと、日吉は振り返りもしないで教室に戻つていった。

まだ夏の盛りなはずなのに、腕にはびっしりと鳥肌が立つていた。

日曜日、俺は気がつくと町を出歩いていた。

それまでも、ヒマさえあれば外に散歩に出歩いていた。

帰る頃には、バカなことをと苦笑するのに、次の日曜日が来れば探さずにはいられない。

そうして一ヶ月は過ぎようとした頃だった。

結局は見つからず、半ば諦めていた。

夏の盛りが過ぎようとしていた頃、それは起きた。

その日はかなり寝苦しくて、確かベッドに潜つてからも一時間くらちはじりじりしていた気がする。

やつとのことでまどろんできた時、耳を劈くような女の悲鳴が聞こえた。

おふくろの声だ。

慌ててベッドを転げ降りて部屋を飛び出す。念のために、高校のときに買った土産の木刀を引っつかんで。

「どうした！？」

親父がどたどたと階段を上つてくる。そう、聞こえたのは俺の部屋の隣。

つまり、栄一の部屋だ。

最悪の予感が過ぎる。嘘だろ、と自然と呟いていた。

どうかゴキブリであつてくれ、なんて場違いなことを考えていた。

親父が乱暴にドアを開ける。俺も後ろに続く。

そこで見たのは、泣いてパニックを起こしているおふくろと、顔が真つ青になつて首を押さえている栄一の姿。

まづい。栄一の目がもう朦朧としてる。

「栄一い！」

親父が慌てて駆け寄つた。振り向き、もの凄い剣幕で俺を睨む。

「救急車呼んで来い！ 早く！」

弾かれるように俺は部屋を飛び出し、万が一の為と部屋の真ん前に置かれていた電話に飛びついた。

手が面白いほど震えて、上手く番号が押せない。

「おち、おち、落ち着け。きゅ、救急・・・」

必死に自分を宥めながら番号を打つ。

すぐにオペレーターが出てくれた。半ばパニックになりながら、早口で栄一が発作したこと、住所を告げた。

そこなら五分でいけるから、とりあえず応急処置をしてくれと指示が出される。だが、耳に入つてもすぐ抜けていく。

何度も同じ言葉を繰り返されたが、俺の頭で日本語になつてくれない。

オペレーターが落ち着いた声で、よく聞いてと言つた。

あなたはこれから言つことを、声を出して繰り返してくれればいい。

つまり、親父に伝える、ということだ。

オペレーターが淡々と指示を出す。俺はとにかく一言一句間違えないよう、瞬きもせずに大声で繰り返した。

親父が手際よく処置を施していく。

気がつけば、自分の無力さに涙を流していた。

俺はただ、バカみたいに言葉を繰り返すだけだったから。

やつと我に返つたときは、俺は病院の待合室に座つていた。

夜中だから消灯されていて、ほんのり非常灯が緑に光つているだけだった。

いつから、ここにいたんだっけ？

きょろきょろと辺りを見回す。患者どころか看護師も通らない静かな病院は、結構不気味だった。

栄一はどうなったんだろう。親父たちなぜここにいるんだ？

ふらふらと病室を歩いていると、奥の病室から医者と看護師が出てきた。

俺を見るなり、ペラリと頭を下げて通り過ぎる。

ああ、あそこか。

違うかもしれないといつぶつには思わなかつた。

案の定、そこは栄一の病室だった。

おふくろは栄一の隣に座り、親父は深刻そうにドアの横に立つていた。

親父が俺に気づき、ぽんと肩を叩いた。

「おう、淳一。大丈夫か。」

疲れた笑みを浮かべる。いや、笑みとは程遠い、引きつりに近いものではあつた。

静かに頷くと、親父も頷いた。

「じゃあ、母さん。明日替えの服持つてくるから。今日はよろしくな。」

わずかに頷いて、おふくろは再び嗚咽を漏らした。

「今日は母さんに任せて、俺たちは帰ろ。」

栄一の顔を見る。今は落ち着いている。顔色も悪くない。

その安らかな寝顔を見ると、今までのことが嘘みたいだ。離れがたい気持ちを抑えながら、俺たちは家路に着いた。

あの後、全然眠れなかつた。いや、うとうとくらはしたが、それでも熟睡は出来なかつた。

親父は学校には行かなくていいと言つてくれたが、俺は無理にでも行きたかった。

授業に出るつもりはない。ただ、家に居たくなかった。図書館でも調べたかったし。

学校に登校してすぐ、図書館に向かつた。

早く見つけなければ、栄一がどれくらい持つかわからない。

早足で中世民族・史学の棚に入つた。

ひんやりとした、古い匂いがする。

そこには、先客がいた。

「・・・田吉。」

田吉も驚いたように目を丸めて俺を見つめる。

「早いな、淳一。」

また魔女関係の本を持つてゐる。いつもならここで悪趣味だとか、からかうところだが、今日はそんな気分にはなれない。

いつもと違う俺に気づいたのか、田吉が本を閉じて俺を見た。

「・・・どうした？ お前、くま酷いぞ。」

「ああ・・・まあ、ちょっと。」

眉を顰め、呟くように言つた。

「・・・栄一くんになにがあつたのか？」

さすが、鋭い。俺は目の前の書棚に目を走らせながら、曖昧に答えた。

「発作か？」

「無言で頷く。」

「今、状態は？」

無口で無愛想なくせに、何故か栄一のことによく心配してくれた。

何度も家にも来ていて、栄一も「ひよせん」と呼ぶくらい仲が良かつた。

「・・・・安定してる。今は、大丈夫。」

日吉が苦々しい表情を浮かべた。本気で心配してくれているみたいだ。

俺は落ち着きなく、本を出したり戻したりをしていた。本のタイトルも頭に入つてこないので、何をしているのか自分でもわからない。ただ、何かをしていったかった。

不意に、日吉が俺の手を止めた。何かと思つてみると、日吉は今までにないくらいに真剣な顔をして、呟いた。

「お前、こうしてゐ場合じゃないんじゃないか。」

「・・・・？」

何が言いたいのか、その目を見つめるが、まったくわからなかつた。「あの都市伝説、頼るべきじゃないのか？」

何を言い出すかと思えば、都市伝説？

「おい、こんなときにふざけんなよ。そんなの頼つてたつて何にも出来ないつて。」

「ここ」で大して手がかりもない本を漁つてるほうが、どうにかなるのか？」「

ひぐ、と口の端が引きつった。

そんなの、俺が一番わかつてんだよ。無意味だつてこと。

「だからつて、そんなのにすがりつけるかよー？」

思わず声を荒げてしまった。

だが、日吉はそれにも動じなかつた。ただ、俺を見つめていた。

「・・・俺は、探す。」

ぽつりと言つた。

「は？」

「俺だつて栄一くんを発作から救いたいと思つてゐ。だから、俺は都市伝説の店を探す。」

「ちょ、ちょっと待てよ。でも。」

「・・・何か行動したいんだ。栄一くんのため。」

そういうと、ふらりとどこかへ行つてしまつた。

「・・・俺だつて、あいつに出来ることならなんでも・・・」
本を取ることも忘れ、ただ、ぎりと歯噛みした。

栄一の病室に行くと、おふくろが疲れた顔で花を生けていた。
俺の顔を見るなり、少し微笑む。

「栄一ね、今は安定してるつて。とりあえず、発作さえ起きなければ大丈夫だらうつて。」

ほつとしてカバンを下ろした。栄一の横に座る。

今日も顔色は大丈夫だ。まだ田が覚めないけれど、もう明日が明後日くらいには起きるだらうとのこと。

おふくろと少し話をしてから、俺は家路についた。

もちろん、行き帰りもちゃんとビルとビルの間を見たりした。でも、見つかるわけがない。

そうだ。こんな都市伝説、どこが信用できるつてんだ。
ちくしょう、と口の中で呟いた。

俺に出来るひとつて、なんなんだよ。

その日、変な夢を見た。

俺は、学校の真裏の通りを歩いていた。

なんでこんな滅多に通らないとこ、歩いてるんだろ。

そんなことを思いながら、俺はきょろきょろと辺りを見回していく。

その足がぴたりと止まる。

自分の体なのに、何に反応して止まつたのか、わからなかつた。
よくよく意識してみれば、そこにあつたのは
小さな骨董品店だった。

店と店の間に「じじんまい」とあったが、その存在感は圧倒的なものだった。

というより、引き込まれていくような妖しい魅力があった。
木の板に店の名前を彫つてぶら下げている。
「音木箱」、と。

はつとして目が覚めた。

冷や汗でべとべとする。気持ちが悪かった。
やけにリアルな夢だった。そこにあるのが本当のよう。
考えすぎて夢まで見たか、と苦笑いして起き上がる。
夢で見たつて何にも解決しないのに。

そう思いながら、自然、大学に向かおうと体は動いていた。
まるでその裏の通りに行こうと、勝手に体が動いているよう。

学校に着くと、いつものように掲示板を確認した。もうくせになつていて。今日も授業に出るつもりはないのに。
見終わると、そのまま学校の裏の通りに足が向いた。
通りはまだ授業中だからか、学生の姿はなく、静かなものであつた。

何気なく、辺りを見回す。

確かに、夢に出てきた通りとそっくりだった。
だがそれだけで何があるというわけでもない。夢は無意識が現れることが多いからだ。

かといって自分に出来ることは何もない。

だったらもう夢でもなんでもすがりつくしかないだろ。

そう自分に言い聞かせ、歩きながら隅々にまで目をいかせた。

そのときだつた。

「・・・お前、こんなところで何してんだ?」

「お、お前二三回のつじつま、

「いや、俺は…

そこで、怪訝に眉を顰めた。

——お前、あの骨董品屋を探してゐるのか？

ハガにしてるわけではない、真剣な顔で言った。
嘘を言つてもなんとなくすつきりしない。

「そうか・・・」

何を考えてるのだろうか。

「ああ、田吾が表情を変えないまま、顔に付いていたのだろうか。」

「いや、信じてもらえないだろうが・・・俺も、変な夢を見た。」

「一歩、夢の井で俺の運命を取つたわナジキなーんだ。たゞ、

「一九四一」

「ああ・・・」二でな、俺がぶらぶらしてると、お前に会うんだ。
それでお前と一緒に歩いて、それで・・・そこで、お前が突然いな
くなつた。そんな夢だつた。」

慌てて俺もその後を追う。

「突然いなくなつたのか？」

「ああ、お前が何かを言つて、振り向いたらいなくなつてた。」

やう、ねむいじ、じんな感じで。

はつとして辺りを見回した。

そうだ、こんな景色だつた。

中華飯店があつて、その先にクリーニング屋があつて、そんでその先には本屋。その先は……

「田吉。この先に、あの店があるかもしれない。」

田吉が驚いて振り返つた。

「本当か？」

「ああ。ここ今まで夢の中で見た。」

自然、早歩きになつた。

まさか、と思いつつも、どこかで確信を持つてゐる自分がいる。

中華飯店を過ぎ、クリーニング屋を過ぎた。

本屋が、見えてきた。

「こ、先だ……」

心臓がばくばくと音を立てる。

十年間探し続けた「あれ」が、見つかるかもしれない。

走りたくなる衝動を抑え、「店」が逃げていかないように足音を静かに立てていた。表現はおかしいだろうけど、そのときは本当にそう思つてたんだ。唯一「榮一」を救える手がかりを逃したくなかったから。

本屋が、近づく。

田吉が不意に、足を速めた。たぶん、あいつも早く見たい一心なんだらう。

いつのまにか、辺りに靄が出来ていた。

気づかなかつた。今までこんなの出でていなかつた。

いや、おかしい。朝ならわかるが、今は午前、といふか昼間。こんな時間に出来るのなんて、あんまり聞いたことない。他の国ならわかるが、ここには日本の東京。靄の出る条件は揃つてないはずだ。

田吉、と呼びかけようとした瞬間だった。

田の前には、誰もいなかつた。

「え、田吉？」

声をかけたが返事はどこにもなかつた。まるで最初から一人だつたかのように。

なんとなく、日吉とは違う次元に来たのだろうと、漠然と感じた。それぐらい、異空間に来てしまつた感じがした。

ふと、足を止めて横を見た。

その途端、そこだけ、さあつと靄が晴れた。

そこにあつたのは、

小さな、とても小さな、骨董品屋だった。

ぞくりと背筋が寒くなる。

まさかと思いつつ、一步店に歩み寄つた。それに呼応するかのよ

うに、そこだけ靄がさつと晴れていく。

店先にぶら下がつた何か。

見てみれば、古い看板のようだつた。

達筆で何か書かれている。

手でそれを掴み、よく読んでみた。

古くなつて黒くなつていたが、しっかりと読める。

「音木箱」と。

再び背筋に冷たいものが走つた。

夢が、現実になつてしまつたのだ。

「うそ、だろ・・・」

信じられない。けれど、目の前の光景は確かにそこには存在する。

嘘じや、ない。

勝手に、足が動き出した。引き込まれるように店に歩き出す。

意識していないのに、手が扉を押した。

もう、後戻りは出来ないことは、わかっていた。

軋んだ音がして、扉が開かれた。中から甘いような渋いような匂いの風が頬を撫でていった。

中は、真っ暗だった。

からうじて日の光で、中に何があるのかわかつた。

骨董品屋と聞いて浮かんでいたイメージそのままのようないろだつた。

絵がところどころにかけてあつたり置いてあつたり、つぼがちょこんとあると思えば、本棚には溢れ出しそうに古本が詰まっている。中に一步踏み込むと、驚くほど冷えていることに気づいた。

ちりん。

扉に取り付けてあつた呼び鈴が、閉まるとき同時に涼やかに鳴った。そのときだつた。

辺りは薄暗いのに、何故かそれだけは浮かび上がるよう見えた。黄金色の刺繡が入つた赤い服を着た、二つの大きな人形。本物の五歳くらいの子どものサイズで、こちらを見ていた。

その突然さと人形とは思えないリアルさに、再び鳥肌が立つた。いや、それは人形ではなかつた。

「歓迎光臨！」

「歓迎光臨！」

二つが声を揃えて言つた。鈴のような、美しい声だつた。

その二つ、いや、二人の子どもは、につこりと笑つて俺の前に走り寄つてきた。

「いらっしゃいませ！」

「いらっしゃいませ！」

にこにこと可愛らしい顔で笑う。

事態を把握できず、呆然としていた俺に、ペこりと頭を下げた。

「お探し物はなんですか？」

「お探し物はどれですか？」

交互に喋り、また笑う。良く見れば、一人は弁髪の男の子、一人は髪を結わえた女の子であつた。

驚きすぎて何も言つことが出来ない俺に、一人は眉根を寄せた。くるりと背を向けてこそと顔を寄せ合つた。

「あれ？　日本人じゃないのかな？」

「あれ？　言葉間違つたかな？」

「おかしいね。動かないよ。」

「おかしいね。喋らないよ。」

「おかしいねえ、と一人が首を傾げた。

そのとき、不意に空気が揺れた気がした。

「こり、一人とも。お客様に背を向けちゃダメでしょ。」

凛とした声。高いのに、重みのあるような、そんな声がした。

部屋の奥から、その声がした。

「いらっしゃいませ。お探しの物なら、ここであなたを待つていましたよ。」

暗がりから出てきたその人物に、怖さや疑問などすべて吹っ飛んでしまった。

さらさらとした柔らかそうな髪は優しい赤色に染まっていた。可愛らしい大きな瞳は吸い込まれそうなほど漆黒の色をしている。まだ十一歳くらいのその少年は八重歯を見せてにこりと笑っている。その美しさに、思わず見惚れてしまった。

ラフな洋服に身を包み、ゆっくりと俺に歩み寄つた。

「僕はこの『音木箱』の主。名を龍稀と申します。」

男女の子どもが少年の裾を掴んだ。

「この子たちは双子なんです。男の子は禮麒。女の子は宝麟。ほら、二人とも挨拶して。」

「禮麒と申します。」

「宝麟と申します。」

ふかぶかと双子が頭を下げた。

「淳一さん、ですね？」

声が出なかつた。何故名前を知つているかという疑問も、浮かんでこなかつた。

本能的に感じていた。

ここは人間が来るような所じゃない。異界の店なんだと。

「お探し物はこちらですか？」

右手の手のひらが舞うように動く。俺は思わず右手を見つめた。

ぴたりと手が止まつたその先に田線を移した。

心臓が、止まつた気がした。

傘立てのような壺に入れられていた、棒のようなもの。

「そ、それ・・・マジ、か・・・？」

「ええ。こちらでしよう？」

少年がそれを壺から抜いた。

かなりの長い。少年の身長を超えるくらいだ。

そしてその先端には、棒の半分くらいの長さの鋭い刃物がついていた。

それは、まさしく。

死神の、鎌だ。

絵にあつた、まさしくそれであつた。

「こちらは死神が落とした鎌です。別の国ではこれを『テスサイズ』と呼びます。大きいでしょう？」

死神の鎌を持ちながら、少年はにこりと笑う。

「さあ、どうぞ。」

鎌の刃物の部分を俺に当たらないように向け、渡してきた。

一生有り得ない夢だと思っていた。

死神の鎌を、手に入れるなんて。

緊張で手が震える。

少年がそつと俺に手渡した。

ずつしりと重い。けど、持ち運べない重さじやない。

現実的な重みが、手のひらから確かに伝わる。

夢じや、ない。

「・・・十年以上、探してた・・・」

俺は鎌に向かつて呟いた。

「ずっとずっと、探し続けてたんだ・・・」

不意に涙が出た。ぽろぽろと後から零れ落ちる。

ああ、やつと、栄一を助けることが出来る。やつと、栄一の役に立つことが出来るんだ。ずっと苦しかった。

俺だけが、元気なこと。

栄一にすべて背負わせてしまったような気がしていい。その思いから今、解放されたように感じた。

泣いている俺を、少年は優しく見つめた。

「よかつたねー。」

「ねー。」

一人の子どもが嬉しそうに顔を見合せている。

嬉しくて伏せていた顔を、俺は我に返ったようにあげた。そういえば、金を持っていない。

何かを買おうと思つて出ていなかつたから、財布を家に忘れていたのに今、気づいた。

慌ててポケットを探るが、金田の物は一つも入っていない。

俺が焦つていることに気づいたのか、少年はやんわりと首を振つた。

「お金は要りませんよ。」これはお金は何の価値もない、ただの飾り物なのです。」

「え？ いや、でも・・・」

「その死神の鎌、ご購入されますか？」

もちろん、と言あうとしたが、金はあろかそれ以上の価値のあるものを俺は持つていない。

しかも、ここは都市伝説の店である。家に帰つて何かを持つてきたとしても、もう一度巡り合える可能性はゼロに等しいのではないのか。

第一、死神の鎌に見合つ物を、俺は持つているのか？

その心配を察したように少年は笑んだ。

「あなたの物ならなんでもよいのです。それも、大切な物ほど価値がある。例えば、そう・・・」

少年は横の棚から古びた本を手にした。

「これは十七世紀ロンドンで、サー・シンプソンという方から買わせていただきました。これは彼の記憶。記憶すべてと引き換えに、彼は大富豪になりました。彼が買つていったのは富豪になる絵画。それを丁寧に仕舞うと、今度は別の棚から青い瓶を取り出した。

その中には、丸い形の美しい宝石が入っている。

「これは八世紀のカリブの海にて、人魚のサレから買わせていただきました。これは彼女の涙。泣くという感情と引き換えに、彼女は人間になりました。彼女が買つていったのは人間になる薬。」

ことりと棚に戻すと、俺に向き直った。

「さあ、あなたは何をお売りになりますか？」

突然そう問われ、俺は動搖した。
何を売る、だつて？

売るものは何だ？

大富豪になるために記憶を売った男。
人間になるために涙を売った人魚。

信じられない話ばかりだが、なんとなく納得出来る。

ここは、人間にも妖怪やモンスターにも、通用する商売をしてい
るのだ。

「大切であればあるほど、良いのです。ちなみにそのデスサイズは

」

少年の瞳の中の瞳孔が、きゅっと細まつた。
まるで爬虫類のような瞳に変化したのである。

「うわっ！」

俺は思わず声を上げた。

「ああ、すいません。僕のこの目は、その商品がどれだけ大切とさ
れているか読み取ることが出来るんです。」

照れたように少年は笑つた。いわば目利の道具ですね、と言葉を付
け加える。

「そのデスサイズは、死神にとつて存在意義そのもの。それが無い

と死神は意味の無い者になつてしまつ。それほど大切なものです。えつと、以前にも四名の方がそのデスサイズをお求めになつておりましたが、それに見合つ物をお持ちではなかつたのでお断りいたしました。」

存在意義と同程度の物を差し出せと言つてゐる。

それは、かなり高額商品であるに違ひなかつた。

「いかがしますか?」

少年が問う。

俺は迷いに迷つた。

存在意義と同じくらいの物を、俺は持つてゐるのか?

「・・・・すいません、何があるのかわからなくて。」

素直に謝る。少年に文句でも言われるかと思ったが、意外にも優しく笑つてゐる。

「ええ、そういう方は多いですよ。特に人間のお客さんには。」またあの瞳孔を尖らせ、今度は俺を見つめた。

俺を踏みしめていたのだ、そう悟つた。

俺は目を瞑つた。

もしここで俺が商品価値無しだと決定されてしまつたら、死神の鎌を手に入れられなくなる。

きつとこの機会をのがしたらもう一度と手に入ることは無いだろう。

「この十年間が、無駄に終わるのだ。

緊張して震えていた俺に、声がかかつた。

「もう大丈夫ですよ。目を開けてください。」

そろりと目を開ける。少年を顔を窺つた。

少年は、満足そうに笑つてゐる。

じゃあ、俺は鎌と同じくらいの価値があるものを持つてゐるということだらうか。

だが、何を売れといつだらう。

「あなたがお持ちの商品で、この品と見合つものはですね。」

す、と少年は俺を指差した。

「あなたです。」

「・・・は？」

「あなたの存在そのものと、この鎌は同じ価値があります。」

意味がわからずに黙る俺を、二人の子どもがつづいた。

「デスサイズとお兄さんは同じなの。誰かにとつてとても大切なの。

」

禮麒と呼ばれた男の子が身振り手振りで言つた。

「前に来た人たちとは違つたのよ。皆自分ばっかりだつたの。デスサイズで誰かを殺そうとしたのよ。」

宝麟と呼ばれた女の子が口を膨らませて言つた。

「でも、お兄さんは違うよ。」

「お兄さんは助けるため。」

「だから、お兄さんは愛されてるの。」

「デスサイズも死神に愛されてるの。」

「同じなの。」

「同じなの。」

「ねー、と二人は声を揃えた。

「な、なんで・・・」

何故、理由を知つている？

田吉にしか話したことなかつたのに。

「ここでは嘘はつけません。」

穏やかに少年が言つた。

「ここでは隠し事もすべて暴かれてします。自分でも知らないものまで。さて、どうされますか？」

少年は俺を見つめる。その目はとても優しかつた。

少年は何も言わず、けれど頭の中に声が響いた気がした。いいんだよ。

例え、死神の鎌を買わなかつたとしても。

それはきみのせいじゃない。

弟は、寿命だったのだから。

そう言われてる氣さえしてきた。

きみは、頑張つたのだから。

不意に鎌を掲んでいる手が緩む。

わかつてた。

本当は気づいてたよ。

もうずっと前から、疲れてたってこと。

俺はもう、死神の鎌を探すのを、やめたかったんだ。
緩んだ手に力が入る。手が震えていた。

自然、涙も溢れていた。

「ごめん。ごめんな、栄一。」

ごめんな、父さん、母さん。

ごめんな、日吉。

俺はもう、疲れたよ。

握っていた死神の鎌を、少年に差し出した。
涙で溢れる目で少年を見つめ、俺は言った。

「これ、ください。」

少年は少し悲しげに言った。

「代価は・・・あなたですよ?」

「構いません。これください。」

双子が顔を見合せている。驚いたようだ。

二人が何か言おうとするのを少年が遮った。

「承知いたしました。」

深々とお辞儀をする。

「では、デスサイズをお売りいたします。」

透き通るような少年の声が、俺の脳に響いた。

気づいたとき、俺は家の前に立っていた。

手には布に巻かれた、木刀くらいに小さくなつた死神の鎌を握っている。

そう、夢じやないんだ。

俺は、とんでもない買い物をしてしまつたのだ。

死神の鎌を買うために、俺は俺自身を売つたんだ。けれどその言葉がいまいちしつくりこない。売つたけど、これからどうなるんだろう。

とりあえず家に入る。中には誰もいなかつた。

きつと親父もおふくろも栄二のところなのだろう。何処へ行つていたのだと問いただされなくてよかつた。

俺はまつすぐに自分の部屋に入ると、死神の鎌を窓辺に飾つた。

今日は満月。その光りが、ちょうど鎌に当たるよつに。

デスサイズを売つてもらつた後、少年は死神の呼び方を教えてくれた。

満月の光りに鎌を浴びせる。そうすれば鎌を落とした死神がやつてくる、と。

アフターサービスといつやつですよ、と言つた少年の顔は、少し憂いを帯びていた。

あなたがその鎌を使ってやりたいことを実行したそのとき、あなたを代価として頂きに参ります。

その言葉が脳裏に浮かぶ。

店を出た直後、いつの間にか俺は家の前に立つていて、今に至る。鎌に巻きつけてある布を外す。

外した瞬間に、鎌は元の大きさに戻つた。これも少年が運びやすいようにとサービスしてくれたものだつた。

月光に光る刃は、禍々しくも美しかつた。

どれだけ待てばいいのかわからず、俺はベッドに寝転がつた。もし死神が来たとして、栄二を助けることが出来たとしたら、俺はどうなるのだろう。

奴隸商人の下に売られるのだろうか。もしくは、人間の新鮮な肉

として売られるかもしれない。

そんな幼稚な想像をしては、ぞくりと身を震わせた。

いずれも、可能性が無いわけじゃないのだ。

なんたって、相手は人間じゃない、と思う。人間のみを相手に商売をしているわけじゃないし。

震える体を必死に押さえつけていた、そのときだった。頭のほうから、がたりと音がした。

慌てて振り返ると、窓が風に揺れただけだった。

なんだ、とほつと息を吐き、再び横になろうとして、気づいた。月明かりが、無くなっていた。

慌てて起き上がる。

窓を見ると、そこには。

ホラー映画に出てくるような、漆黒の布を纏つた、骸骨がじらじらを見ていた。

息が喉で詰まる。あまりの非現実的な光景に脳が幻覚だと叫ぶ。骸骨はゆっくりと窓枠に手をかけ、中に入ってきた。

死神の鎌を、じつと見つめながら。

死神は窓枠を乗り越えて、俺の部屋に降り立つた。

鎌を見つめていた顔が、ゆっくりとこちらを向く。

目がある場所には、ただ真っ黒な空洞があるだけだった。でも、俺を見つめているのを感じる。

もしかして、と恐怖に満ちた心で思った。

俺を売るというのは、死神に命を取られると言うことなのではないかと感じた。死神の鎌を買う代わりに、俺の魂を売る。有利得ない話ではない。

いやむしろ、そちらの方が筋が通っている気がした。

「ぐり、と喉が鳴る。震えは最高潮に達していた。

俺は覚悟した。死神に命を取られようと、それで栄一が助かるな

ら。

でも、怖い。

死神は俺を覗き込むように首を傾げて見つめている。

真っ黒な布がふわりと動く。

そこから見えたのは、異様なほど真っ白な、骸骨の手。

それが俺に向かって伸びてくる。

俺は目を瞑ることさえ出来なかつた。

震えながら、その手が俺を殺すのを、待つしかなかつた。

俺の首に向かってきたその手が、突如方向転換した。

俺の右手をいきなり掴んだのだ。

叫ぶことすら出来ない俺は、完全に固まつてしまつた。冷たい骨の感触が全身の肌を粟立たせる。

右手の骨の手が俺の右手を掴むと、まるで握手するかのように軽く上下に振つた。

「きみがデスサイズを見つけてくれたの？　いやあ、ありがとう！助かつたよ！」

唇も舌もないはずの死神から、意外にも明るくて活発な声が聞こえた。しかも少年のような無邪気な声だ。

俺はきょとんとして骸骨を見つめた。

「もー、探して探してさあ。二百年くらいは経つたかなあ。ずっと無くて諦めてたんだよねえ。」

氣さくにそう言つて、死神は俺から手を離した。

「そりや二百年くらいあつという間だつたけど、やっぱ仲間からバ力にされるでしょ？　もう必死で必死で。」

あははは、と軽やかに笑う。

「ねえこれ、どこにあつたの？　海の底？　山の中？　それとも…

・あ、博物館とか！」

恐怖心が驚愕で吹つ飛んだ俺は、啞然としながら答えた。

「そ、それ・・・・音木箱つて、いう、あの、骨董品屋に・・・」

「ああ、音木箱！　あそこにあつたのかあ。行けば良かつたなあ。ペしやりと自分の頭を叩く。いや、正確にはかつんと乾いた音がした。

「そつかそつか。そこにあつたのか……ん?」

何かに気づき、考え込むように死神は首を捻つた。

「そうすると……きみ、これを買つたの?」

はつとして顔をひきつらせる俺に、死神は手を振つた。

「あ、大丈夫大丈夫。強奪する気はないよ。それじゃルール違反だしね。でも、そうすると、これはきみのなんだよなあ。」

うーん、と考え込んでいる。

俺は恐る恐る口を開いた。

「あの……これ、あんたのなんだろ?」

「うん? そうだよ。あ、でもいまはきみのだね。」

唾を飲み込み、俺は意を決して言つた。

「取引……しないか?」

「取引?」

「あんたはこれを返して欲しい。そうだろ?」

「うん。でないと僕、お仕事出来ないからねえ。」

「俺は、あんたの力を借りたい。」

「僕の力?」

俺は勇気を出して立ち上がつた。ベッドを降り、死神に背を向けないように動いて、死神の鎌を掴んだ。それをぐいっと死神に見せる。

「これをあんたに返す代わりに、俺に力を貸してくれ。」

死神が驚いたように動きを止める。俺は強気に出た。

「これがないと、存在する意味がないんだろ、あんた。」

「そ、そただけど……」

「取引するのかしないのか、どっちだ?」

冷や汗が背中を流れる。怖くてしようがなかつた。

しばらく思案するような時間が流れた後、死神は渋々頷いた。

「仕方ない。本当は人間に深く関わっちゃいけないんだけど……

いつか。面白そうだし。」

こくりと頷いて見せた。俺はそれを見て、鎌を差し出した。

白い骸骨の手がそれを受け取る。嬉しそうに死神は鎌を抱きしめた。

「ああ、よかつたよかつた。久しぶりの鎌だ。」

喜びの再会もつかの間、死神は俺を向いていった。

「で、誰の命を奪えばいいの？」

久々に鎌を振りたいのか、楽しそうな声を出した。

俺は慌てて両手を振った。

「違う違う！ 命を奪つて欲しいんじゃなくて、命を救つて欲しいんだ！」

「えー？」

よくわからぬと言いたげに首を傾げる。

「とにかく、病院まで来てくれ。弟が危ないんだ。」

急いで部屋を出ようとした俺とドアの間に、死神が瞬時に移動していた。

さっきまで俺の後ろにいたはずなのに今は俺の前にいる。それが、改めて人外のモノだということを認識させられずにはいられなかつた。

死神は鎌を持つたまま言つた。

「よし、病院だね。えつと、きみの弟の名は？」

「え・・・あ、栄二・・・」

「えいじ、えいじ・・・」

上を見上げ、うーんと唸つた。

「いいから早く行かないと」

「あ、待つて待つて。もうすぐ・・・」

そう呟くが早いか、あつと死神は声を上げた。

「いたいた。栄二。一人だけ。」

どこを見て『いた』と言つてているのだろうか。俺も同じ方向を見たが何も見えない。

「僕の服に掴まつて。」

白い骸骨の手が黒い服を差し出してきた。

戸惑う俺に死神が言った。

「時間、無いんでしょ？」

その言葉に誘われるよつに、俺は死神の服を掴んだ。

「じゃあ行くよつ！」「

ドアとは反対方向に死神は走り出した。

反対方向。つまり、窓側だ。

「ちょちょおつと待つて！」

窓から死神が躍り出る。そのまま後ろを引き摺られるよつに俺も飛び出した。

月光が間近に迫つた気がした。

死神は重力に反して浮かび続けている。

いや、浮かぶという表現は少し違う。

もの凄い速さで死神は飛んでいるのだ。

空気が暴風のよつに俺に襲い掛かってきて、息を吸つのもやつとだ。

景色が凄い勢いで俺の前を過ぎていいく。下を見たら貧血をおこしてたかもしれない。

止めて、と言つ前に、死神がどこかの窓へとするつと入つた。抵抗できずに俺も続く。

やつととともに息が出来ることが嬉しくて、俺は喉を押さえて何度も呼吸した。

「ほら、彼でしょ？」

平然としている死神が俺に声をかけた。

整えていた俺の息が止まつた。

いつのまにか、俺らは栄一の病室にいた。訳が分からず俺は死神を見上げた。

「あれ、違う？」

その言葉ではつと我に返ると、俺は慌ててベッドで寝ている人物を見た。

「うそ・・・だろ。」

間違いなく、栄一だつた。

俺の家からこの病院まで少なくとも電車で一駅分の距離が離れているはずなのに。

たつた数十秒で、ここまで来てしまつた。

「彼でしょ？」

その言葉に頷く。なるほどね、と死神は呟いた。

「彼はねえ・・・明日までの命だね。」

何気なく言い放つた一言が信じられなくて、俺は死神を見上げた。

「それ・・・本当なのか？」

「うん。彼は明日のリストに載つてるよ。」

「リスト？」

「死神のリスト。死神は命を奪つものだつて誤解してる人も多いと思つけど、死神の大体の仕事は導くこと。あの世つてとこにね。まあたまに奪つこともあるけど。」

「栄一・・・明日死ぬのか？」

かちや、と死神は鎌を栄一に向けた。

「そうさせないために僕と取引したんでしょう？」

「じゃ、じゃあ！」

「リストの中にある彼の名前を切るよ。そうすれば、明日のリストから消える。もちろんこれは違反行為だけど・・・取引しちやつたしね。これで彼も元気になるだろうし、おそらく今度は何十年後のリストに写されると思う。」

鎌を振り上げ、栄一の真横にぶすりと突き刺した。

紙が破れるような音がしたのはきっと、聞き間違いではないだろう。

死神は得意げに胸を反らした。

「これで大丈夫。もう安心だよ。」

栄一を見れば、確かに顔色がとても良くなつていた。全身から生気が漲つっているかのようである。

俺は栄一の横に駆け寄つた。そつと髪の毛を撫でる。

「こんなに顔色の良い栄一は、生まれてはじめて見た。

「あ・・・ありが・・・ありがとつ・・・」

涙がぽろぽろと零れた。嗚咽が止まらない。

やつと、栄一を助けることが出来たんだ。

嬉しくて泣き崩れる俺の肩を死神が叩いた。

「じゃあ、取引成立。この鎌は返してもらひうね。」

泣きながら頷いた。

死神は俺の後ろをすり抜け、窓枠に立つた。

今にも歩き出そうとしたその足が止まる。くるりと振り返った。

「ねえ、一つ聞くけど、僕の鎌を何で買ったの?」

顔を上げられず、俺はただ自分を指差した。

「あ、きみを売ったの?『音木箱』に?」

ふうん、と死神は小さく言つた。

「そつか・・・だから、ねえ。」

じつと鎌を見つめる。言おうかどうか迷つていて見えた。

俺は気になつて目線を死神に向かた。骸骨の顔がこきつと動く。

「あのねえ、言つたほうがいいのかどうか迷つたんだけどね。きみ・

・・寿命が無くなつちやつたよ。」

「・・・?」

「だからね、きみは六十七年ハケ月」十一日後に死ぬ予定だつたん

だけど、そのリストからきみの名前が無くなつちやつたんだ。」

「それつて・・・別のリストに移つたつてことか?」

「違うよ。リストにきみの名前が無いつてことはねえ、きみは死ねなくなつちやつたつていう意味だよ。」

その言葉がよく理解できずに固まつていてる俺を、死神は不憫そうと言つた。

「『めんねえ。僕の鎌を買つたばかりにこんなことになつちやつて。』

「めんね、ともう一度言つと、死神は窓枠から外へ躍り出た。

「ちよ、ちよっと待てよー。」

慌てて窓枠にすがりつく。だが、そこには夜の街しか存在しなかつた。

「あのねえ、音木箱に行けばわかるよ。」

後ろから声がして、ぱっと振り返った。が、誰もいない。

病室の外にも飛び出しが、誰もいない廊下が広がっているだけだった。

栄一が助かつた嬉しさと死神の言葉の意味が、頭の中をぐるぐると回っている。

呆然としながら病院を出て、俺は駅へと歩き始めた。

夜氣がひんやりと冷たい。寒さにぶるりと震えながら歩き続けて、気づいた。

駅から家まで帰るにも、金を持つていないので。

しまつた、と俺は歯噛みした。

父さんと母さんはきっとすでに家に着いているだろう。病院から電話をかけねばなんとかなる。

踵を返して病院へと戻ろうと歩き出したその足が、止まつた。

目の前に、あの『音木箱』が立っていたから。

「はっ、え！？」

今までそこは公園があつたはずなのに。

いつまにか周囲には深い霧が立ち込めており、他の建物はどこにも見えない。ただ『音木箱』だけが見えていた。

信じられない光景に立ち尽くしていた俺は、今まですっかり忘れていたことを思い出した。

そうだ、死神の鎌を買つために、俺は自分を売つたんだ。

だから、俺という商品を取りにきたんだ。

恐ろしさに身震いした。奴隸商人や人肉販売の文字が頭を掠める。

でも逃げようとしたところでこの霧だ、逃げられはしないだろう。それにここが死神の鎌を売ってくれたからこそ、栄一は助かつたのである。逃げるわけにはいかない。

両手を握り締め、俺は音木箱へと歩き出した。

ぶら下がった古びた看板が、嘲笑うようにぶらぶらと揺れている。震える手を押さえつけながら、俺は音木箱の扉を押した。きいい、と軋んだ音が耳に響く。あの苦く甘い匂いのする風が通り過ぎていった。

店内は相変わらず真っ暗だった。月明かりがわずかに差し入り、輪郭をやつと浮かび上がらせている。

そして月明かりは、中央にいた少年をも照らし出していた。ばたん、と扉が閉まる。今度は鈴の音はしなかった。

少年は穏やかな笑みで俺を見つめていた。

俺も少年を睨むように見返す。この穏やかな顔の裏には、もしかしたら人身売買の素顔があるのかもしれないのだ。

少年はにこりと笑い、言った。

「おかえりなさい。」

言つが早いが、少年はいきなり俺の手に何かを押し付けた。

「はい、これ。箱の中に仕舞つておいてね。」

「・・・は？」

「あとは久々に掃除しようと思うから、手伝つてね。」

軽やかに笑う少年の後ろから、一人の双子が飛び出した。

「お帰り、りょーいち！」

「お帰り、りょーいち！」

同時に言つと、俺のズボンの裾をぐいと引っ張つた。

「りょーいち、遊ぼうよ。」

「りょーいち、遊んでよ。」

左右からぐいぐいと引っ張られ、俺は危うく倒れそうになつた。

「な、なんだよ、やめろって。」

慌てて双子から逃げると、あちこちから笑い声が響いた。

「活きの良いのが入ったのう。」

「善き哉善き哉。」

「ちとからかってくれようか。」

「だめよう、可愛い坊やにそんなことしちゃ。」

笑い声が色んな方向から聞こえる。俺は驚いて辺りを見回した。が、声がするのにその声の主はない。

「青年。早う、我輩をベッドに案内したまえ。」

真下から渋い男性の声が聞こえ、反射的に下を見た。少年から渡されたのは、白い万年筆だった。白いといつてもだいぶ古臭くてところどころ黒ずんでいる。

それが、喋っているのだ。

「うおわ！」

驚いて万年筆を放り出した。かちん、と床に転がる。

「あうち！ 我輩を放り出すとは、けしからん輩だ！」

万年筆が怒ったようにぐるぐると転がる。それを、少年が拾つた。
「じめんね、ミスター・クリミナル。彼は新人だから・・・」「まったく、新人の躊躇らい、しつかりせんかい！」

少年がくすくすと笑う。同時に、あちこちからの笑い声も高まつた。

「しつ、新人！？」

訳が分からず立ち尽くしていた俺の腕を、誰かが引つ張つた。見れば、双子の女の子、宝麟がぶんぶんと俺の腕を振り回していた。

「りょーいち、ここで働くんでしょ？ ねえ、小龍？」

宝麟が聞くと、少年がにこりと笑つて頷いた。

「そうだよ。涼一は今日から僕らの仲間だよ。」

「やつた！ 遊ぼう、りょーいち！」

禮麒が嬉しそうに声を上げる。

俺はやつと、事の次第を理解した。

「ちょっと待つてくれ。ここで働くつて、新人つてまさか・・・」

少年はにっこりと会心の笑みを浮かべた。

「やつ。きみはデスサイズを買つた。そしてきみはきみ自身をこの店に売つた。つまり今日からきみは僕のアシスタント。よろしくね、涼一。」

がつしりと俺と握手する少年からは、無邪氣さしか感じられなかつた。

「あ、アシスタントつて、俺が！？ 僕は人間だぞ！？」

「もう不死なんだから人間じゃないでしょ？ あれ、死神から聞いてなかつた？」

「・・・あ、いや、聞いたけど・・・」

握手していた手を離し、少年はおどけるように頭を下げた。

「歓迎しよう、涼一。ようこそ、我々黒影の世界に。」

「ま、待つてくれよ！」

「仕事は山盛りだからね。あー、よかつた。そりそろアシスタントが欲しかつたんだよね。」

そつ言つてとんとんと話を進める。俺は置いてけぼりにされているようだ。

「おいおい仕事は教えていくからね。それで覚えて
ちりん。ちりん。

涼しげな音が鳴る。

「おや、お客様が来るね。うーん、十世紀のローマか。」

その言葉を合図に、騒がしかつた笑い声が静かになつていつた。

「さあ、音木箱は眠らないよ。始めよう、涼一。」

「ま、待てつて。」

「僕のことはなんと呼んでも構わない。マスター、龍稀、ドラクル、小龍・・・僕の名前はたくさんあるから。」

「ああ、そうだ、と少年は声を上げた。

「涼一じゃあ不便だからなあ。きみはリョウにしよう。」

「はあ！？ 不便つて、なんで？」

「ここには様々な世界、様々な時代からお客様が来るからね。もちろん人も異形も来る。本当の名前は知らないほうがいいのや。」

俺がやうに質問する前に、少年は楽しそうに言った。

「さあ、仲間も増えたことだし、みんな、楽しそうやうやく。

ぱんぱん、と叩いた手が合図になつたよつこ、店の扉が軋みながら

開いた。

少年 龍稀が丁寧にお辞儀をする。

「いらっしゃいませ。お探しの物なら、あなたをここで待つていてましたよ。」

終

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0182m/>

異界の骨董品店～オルゴールの鳴る店～

2010年10月10日19時41分発行